

2019年7月25日(木)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さんWS 絵巻の世界

1, 絵巻の専門家・恋田知子先生

2018年7月より、ないじえる芸術共創ラボに加わってくださった^{りょうあせん}梁亜旋さん。昨年度は、さまざまな古典籍の形態にお詳しい入口敦志先生(当館教授)とともに、それぞれの形式の特徴や意味、内容と外観のかかわりについて学んできました。

その中で、大切なもの、秘すべきものを認める^{かんすぼん}巻子本(巻物)という存在の神秘的な魅力に惹かれたという梁さん。2019年度初めとなるワークショップでは、絵巻や奈良絵本¹にお詳しい恋田知子先生(当館准教授)に、魅力的な作品の紹介や、その成り立ちについて解説をしていただきました。



¹ 奈良絵は、素朴な絵柄に鮮やかな岩絵の具で彩色した作品群を指し、絵巻と密接なかかわりをもつ。

2, 「うらしま」

まずは、現代でも馴染み深い「浦島太郎」の絵巻を紹介してくださいました。

国文学研究資料館に所蔵されている絵巻「うらしま」²は、彩色が美しく残った豪華なもので、少しずつ広げてゆくにつれ、歓声があがります。ストーリーは現在でも読まれている昔話とほぼ変わらず、浦島太郎が竜宮城で歓迎される華やかなシーンは見ごたえがあります。竜宮城の建物や、そこにいる人々の様子は、なぜか中国風に描かれていて、梁さんは興味深そうに観察しておられました。



² 貴重書(99-185)。
新DB: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200017771/viewer/1>

2019年7月25日(木)

絵巻の方法として、俯瞰で情景を描きつつ、霞を配置することで余計な部分を省略したり、奥行きを出したりすることが挙げられるそうです。画面処理のテクニックがあることで、さまざまな描写が可能になったのですね。

国文研本の特徴としては、浦島太郎が玉手箱を開けてしまった時、箱の中から赤い煙が出てくる場所なのだとか。普通は白い煙なのにわざわざ赤を使ったあたり、なにか意味があるのかもしれませんが。



浦島太郎は人気の題材で、江戸時代初期に出版された³ 御伽草子^{おとぎそうし} (絵本の一群)でも扱われています。各場面がどのように描かれているのか、国文研に所蔵されている作品を並べて見比べたところ、

³ 国文研蔵 (96-814-1~23)

媒体によって受ける感覚が大きく違うことに気がきました。

絵巻は右から左へと少しずつ開いてゆくため、物語が順番に現れます。一人が手元で開き、それを囲んで数人で眺めることができます。それに対して、御伽草子は冊子本なので、好きな場所を開くことができます。絵巻の場面に合せて、文字の部分を一気に省略してしまうこともでき、手軽で便利なのが魅力です。

梁さんは、絵巻を広げる時の「手間のかかる感じ」が気に入っているそうです。一気に見られない分、華やかな絵が出てくるとサプライズ感があり、よりわくわくするのだとか。そこが、少しずつしか見られない絵巻の魅力なのですね。



新DB : <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200019867/viewer/1>

2019年7月25日(木)

3, 描かれないはずの庶民の暮らし

梁さんにとって、絵巻の魅力はもうひとつあります。それは、昔の庶民の生活が描かれていること。

日本でも中国でも、公的な記録として残るものには、庶民階級の人々の生活の様子が描かれることは、なかなかありません。梁さんによると、中国では特にその傾向が強く、昔からある民間の文化について知ることは困難なのだとか。



ところが絵巻では、作られた当時の普通の人々の生活が、背景などに描き込まれている場合があります、それがとても興味深いのだそうです。「うらしま」でも、華やかでファンタジックな竜宮城だけではなく、浦島太郎が元々住んでいたはずの村の様子が描かれていて、当時の人々の生活を垣間見ることができます。梁さんは、豪華な

けでなく、素朴な魅力をも持つ絵巻に惹かれています。



この話を聞いて、私は江戸時代に流行した「考証」という営みについて思いを馳せました。江戸時代後期になると、自分たちの生活や文化は、どこから来ているのだろうかと考えることが流行します。現在でも、100年ほど前のことが既に分からないことが多く、研究の対象になったりしますが、江戸時代でも同じこと。特に“普通の生活”のことは分からなくなってしまうため、古い絵巻を用いて考証を行っています。絵巻は、昔に生きた人々の生活を知るよすがとなるのだなあと、改めて実感しました。

4, 梁さんの新作「布老虎」

梁さんは、このように、現代ではよく知られていない中国の民間信仰や芸術に関心があり、それを現代芸術として表現し、現代にアピールしたいと考えておられます。

2019年7月25日（木）

この日は、9月に開催を予定されている個展に向けて制作中という「布老虎（クロスタイガー）」を持ってきてくださいました。布老虎とは中国の伝統的なぬいぐるみで、子どもが生まれた時に魔除けとして作られたのですが、現在では東北地方の農村にしか残っていない文化なのだそうです。

梁さんは、布老虎をモチーフとした新しい作品を、個展に向けて制作中なのだとか。ご自身の感性で、消えゆく伝統文化を新たに表現するのが、自分の責任だと感じていると語ってくださいました。

これまで、右から左へと徐々に開かれてゆく、絵巻のマテリアルとしての魅力に惹かれていた梁さん。ご自身が普段からテーマにしておられる「消えゆく文化」を残したツールだと実感されたことは、今後どのように創作活動に影響してゆくのでしょうか。とても楽しみです。

